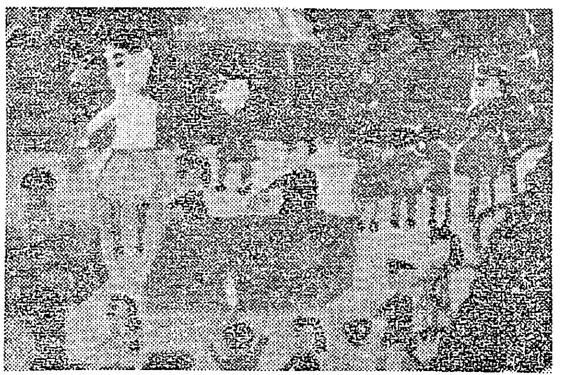
絵にみる子供の心理

正しい指導が性格に現れる

さいきんよく社宅の主婦の間で、「子供がマンガばかりかくので困る。これを直すために絵を習わせに行かせたいがよいでしょうか」といわれていることを聞く。大牟田でも児童画への関心がこのごろ急に高まってきており、それだけに指導を誤れば大きな問題ともなりかねない。この問題について大牟田教育研究会の顧問でもあり絵と子供の心理に造詣の深い家永勝之亮氏についていろいろ伺ってみた。

× ×

去る十一日から松屋デパートで児童画展が開かれたが、会場には各学年毎に絵が展示され特にこんな絵は子供にはかかせたくない、こんな絵をかかせたいと整然と区別され注目を引いた。これは創造美育協会主催であり、絵を通じて必ず秀れた絵をかくということが目的でなく、よい絵をかいて行く中で子供たちの調和のとれた成長を中心に指導するというのが眼目になっている



困る！子供のマンガ

まず絵の子供の心理に及ぼす影響の大きいのには目を見張らせる。家庭不和の環境で育つた子供はそれが直ちに絵にあらわれるという。蛇やゆうれいの絵を好んでかく子は家庭不和の環境に育てられている子に多いともいわれる。

[illegible]

まず子供のマンガが大人の口々にのぼる。好んで子供はマンガをかくのだ。だがこれを頭ごなしにいくら叱つてもだめで、これは大人の世界の流行歌や菓子のようなもので、害にもならぬかわり益にもならないものだ。その時々の時代相からくるもので不可抗力的なのである。放つておくと自然治るし正しい絵への関心を煽ると明るい目が開けてもくる。また、低学年生の塗り絵も盛んでこれも親として何時までもほうつておくわけにはいかない要素を多くふくんでいる。子供の絵にはいつまでも動きがなく、はつらつとして豊かで積極的な絵が大きくなつてもかけずに終り、成長期の子供の心理もそういう向きに傾く場合が多いという。よい絵を指導することによつて明るい正しい感覚を養わせ、決断力にとむ立派な社会人につくりあげることもできるようになるそうである。新めて子供のかく画へ関心を示さなければならないのではなかろうか。

創作

＝入選二席＝

煙

吉野廉夫

（一）

炭坑の朝は早い。早出の鉱夫が出勤するころは朝帰りの鉱夫も地下足袋を響かせて行く。

そこかしこで、ガラをたく七輪の白い煙がごみごみした社宅をけむたく包む。

さすが風は冷たかつたが、今日も残暑の名残りを思わせる朝焼けが、広つぱの雑草に映じている。阿藤修平は先刻よりその広つぱの木かげで、夜勤の疲れた体を休め人を待つていた。

探炭夫とすぐわかる目ぶちがまだ薄汚れていた。修平はもう一度痰を切つた。どす黒い粉炭が面白い程出てくる。修平はしびれを切らしたのか大きく欠伸すると、にがい煙草をはき捨てとうとう立上つた。こう人通りが多くなると清子と逢うのもまづい。昨夜、あれ程待つていてくれと哀願した清子が憎らしくなつてきた。清子は修平より十も年の多い後家だつた。夫を坑内落盤事故で亡くして一年余悲劇の幾月を絞涙で送りながらも弔慰、退職金等相当の大金をもらい、とかく話題が多かつた。皮肉な言葉で云えば、一躍公傷成金になり、ろう断からくる笑えぬ狼狽だつた。

探炭夫の修平と深い仲になつたのも、死んだ夫が仕事仲間ばかりでなく、会社の寮生だつたからである。さすが清子も世間体を考えすぐ入替採用を斡旋してもらい、寮の炊事婦として働いたが、三十を過ぎたばかりの清子には何でもない労働だつた。

「妙子、まだ頭が痛むかい。熱は下つたようだけどね、少しご飯食べてごらん」

清子は一睡まんじりともしなかつた。とんだ末つ子の風邪で明方まで足をとめられ、今朝の修平との約束を破つたのだつた。

「母ちやん、今日はずつと家に居てね」

枕もとの氷のうが痛々しく、カサカサかわいた小さな口から妙子は精一ぱい云つた。

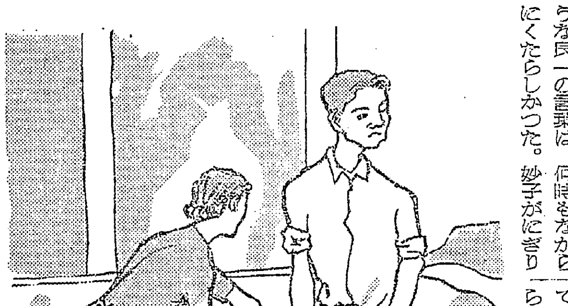
「…はいはい、でも熱も下つたからもう大丈夫よ妙ちやん。兄ちやんも居るんだから、母さん一寸寮まで行つていいでしょう」

「いやいや、母ちやんそばに居て」

妙子はあくまでも清子の手を放さなかつた。

「母ちやんの馬鹿！妙子が可哀想だよ。寮、寮つて何が寮だい。隣りの叔母さん達も云つていた。又阿藤の奴に逢いに行くんだろう」

茶わんに味噌汁を掻混ぜながら長男の良一はそわそわする母を罵倒した。清子はずきり針で刺すような良一の言葉は、何時もながらにくたらしかつた。妙子がにぎりしめている両手をもぎ放すとかけ寄りざま、飯を頬張る良一の顔面を容赦なくたたいた。ぐらり持つた茶わんがこぼれて良一のシャツに菜つ葉が飛び散つた。



「この子は……何という事を云うんだろう。そんなに母さんが憎いのかい」

「……」

「子供のくせに、良一の悪たれ」

良一は顔をまつ赤にして清子をにらみつけた。歯をくいしばり涙をかみ殺している。妙子はふらふらしながら起上り、清子にしがみつくとわーと泣きだした。

「母ちやん、嫌々兄ちやんを打たないで」

「ー妙子。二階に来い、母さんにかもうな」

強い声だつた。良一は箸を投げ捨て、食卓をけとばしながら階段をかけ登つた。

（二）

寮の門をぐるぐると枯れかかつた松が五、六本糸爪を絡ませて、ひようたんの形をした泉水を取囲んでいる。日曜日等よく鉱員達が釣に出かけるが、獲物は殆ど泉水に投げこむのですごく殖え、鮒、鰡魚、うなぎまで群泳していた。煤煙が多いので水は何時も汚れている。港にある火力発電所の数十本の煙突から吐出す煤煙は、泉水ばかりでなく風向きによつては、全然窓を開けられない炭住街だつた。

清子はとうとう寮へ来てしまつた。溺者が投げられた一本の綱にしがみつくように、清子は修平との愛情の執念を燃やした。どうしても別れるという修平をこの手から金の力を借りても死んでもはなすものかと思つた。事務所に欠勤届を出したので、清子は寮の玄関からはいらず勝手知つた裏門の非常扉を開け、廊下を渡つて行つた赤い鼻緒の下駄を前掛けにかくし足音を忍ばせて通つた。修平の部屋は真ん中の二階の端で、六畳間で独りで起居していた。

「……修平さん、修平さん、起きて頂戴」

鍵を掛けた戸は無情にも開かない。清子は何度も、しかし軽くノツクしながら修平を呼んだ。夜勤の疲れで熟睡しているのを起すには一寸時間がかかつた。

「……清子さんか。ああ頭が痛い」

目を充血させた修平は軽く舌打ちしながら、バサバサした髪を掻きむしつた。半身裸体は浅黒くたくましかつた。

「今朝はすみません。妙子がひどく熱を出して、本当に申し訳なくて」

修平は上れとも云わなかつたが清子は素足で廊下を歩いて来たので汚れた足の裏を塵紙で何度もふき、さつさとすわりこんでしまつた。

「ねえー修平さん、あたしは絶対別れないから。昨夜どうしてあんな事したの。背広も靴も全部お返ししますつて。逃げるようにして出て行つたわ」

「清子さん、俺は何度も云うようにこれ以上、人に笑われたくないんだ」

修平は面倒くさそうに横向いたままだつた。

「よして、何故嫌いになつたとは云わないの」

清子は真剣だつた。修平が当惑そうな顔をすればする程、涙が流れて仕方がなかつた。

「清子さん、寮の者も、いや社宅の人達が修平の奴、金が目当てだ抜目のない野郎だと笑つているのが聞えないのかい。俺は口惜しいんだ。こんな関係が情なくなるんだ」

「何よ、そんな事ぐらいで。修平さんは卑怯よ、もう少し真面目に考えて」

清子は身を投げ出して修平の寝ていた蒲団に崩れた。白い首筋に恥しそうな後れ毛がもつれて、おえつする度にそよと動いた。

「清子さん、駄目だよ、隣りに聞かれるよ」

「……」

修平は所作なげに清子の丸い肩に手をやつた。手に転がしたいような赤の水玉模様のワンピースだつた。清子は振返ると修平の太い腕を抱きこんだ。はげかかつた口紅がゆがんで荒い吐息が、修平の若い胸に鋭く突刺さるのだつた。

「ああ、俺は一体どうしたらいいのだ」

「修平さん、あたしを捨てないでー」

清子は勢一杯の力で修平を倒していつた。

（三）

良一は学校の夏休みが終る前にどうしても熊本の叔母の処に行かねばならぬと思つた。

ここ二、三日全然社宅に帰つて来ない母を憎いと思うより、顔を見るのも不潔だと思つた。

良一は左腕に仰々しくほうたいを巻いていた。それは清子があわただしく寮に行つた日だつた。良一は修平が風呂敷に包んで返してきた背広を、数カ所はさみで切り破り、三千円の皮靴も共同便所に投げ込んだのだつた。小さな憤激を曲つた行動に依つてたたきつけた良一の仕業は、清子をのけぞるように驚がくさせた。何故ひねくれるのか反省しない清子は、良一を打擲することによつて修平の顔色をうかがつた。

「出て行け、出て行け」と清子にののしられる度に良一はきよ傲になり「ぼくはもつと悪いことをして、母さんを阿藤の奴から取返すのだ」と恐喝した。しかし妙子と二人で食卓を囲む時は、淋しさがあわれに思えて泣きたくなるのだつた。

「妙ちやん、明日熊本の叔母さんの処に行こうね。風呂にでも行つて早く寝よう」

良一はボールに食器を移しながら云つた。一椀の冷し素めんが半分も減つていなかつた。

「兄ちやん、母ちやんを迎えに行こうか」

「寮に？、馬鹿。さあタオル持つておいで」

妙子はべそをかいたが、神妙に立上り洗面具を持つてきた。すつかり暗くなつた空。星は無数に出ていたが風が強かつた。

「妙子、帰りに市場で羊かん買つてやるね」

「うん」

妙子はやはり機げんが悪い。良一の肩につかまつても始終四方を振返り、もしやと母の姿を求めた。共同市場は浴場の通り道にあつた

「羊かん二本と、廃巻一本下さい」

良一は威勢がよかつた。

「兄ちやん、そんなに高いお菓子いらない」

妙子は呆然とし、代金が心配なのか小さな声で何度も私語き、良一の顔をうかがつた。

「妙ちやん、心配ご無用、ほーら」

良一は得意そうに自分のさいふをのぞかせた。百円札が千円札が何枚も重なつて膨らんでいる。

「わあー凄い。兄ちやんは大金持ちね」

「うん、びつくりしたろう。実はね。ぼく、母さんがお金蔵つている所をこつそり知つているんだ」

良一は呆気にとられた妙子に、笑いながら菓子包みを握らせ店を出た。

家に帰ると良一は雨戸を閉め、妙子を寝せつけようとした。空つ風がパタンパタンと硝子戸をたたき、妙子が泣きだしそうになつたからである。羊かんも一口食べて枕もとに投つていた。

「兄ちやん、母ちやんが帰つて来るといいね」

「うん、そんだ、明日の旅行ね、妙ちやんは赤いスカートだろう。アイロンかけとこう」

良一は妙子が仲々寝つきそうもないので、起上り、タンスの中を物色した。振子が緩んでいるのかねむそうに柱時計が八時を打つた

風は益々強く、遠雷さえ聞えて微に聴えた。妙子は恐い恐いと泣き出してしまつた。

「妙ちやん、恐がる事はないよ。兄ちやんが面白い童話を聞かせるよ」

良一は仕方なく又、妙子に添寝してやつた。

「……底なし沼の前に来たアラジンは、そこでランプを抱え目を閉じて考えるんだ。妙ちやんも目を閉じてごらん」

良一も妙子もしつかり手を握り合い、目を閉じると風さえやんだような気がした。漸く時間がたつた。体の温もりは良一を激しく睡魔が呼んだ。何時しか妙子も眠つてしまつた。赤いスカートの上に置忘れられたアイロン、スイッチがひねりつ放しでどんどん時間が経過する。燻れる煙が閉め切つた部屋に白く幾筋も立昇つて、無心に眠る二人を包んでいつた。

選評

野間 玄

「煙」（吉野廉夫）二位。夫を落盤事故でなくして寮炊事婦になつた女が、年下の探炭夫に愛情の飢えを満そうとして家を忘れているうちに、子供たちは淋しい暮しのなかで火事を起してしまう。

一番よくまとまつているが、ストーリーにとらわれ、探炭夫のぼく然とした性格や態度の追求が十分でないため、読後の印象がよわい。文体にも新しさがたりない。しかし今後に期待できる力を感じさせる。

映画

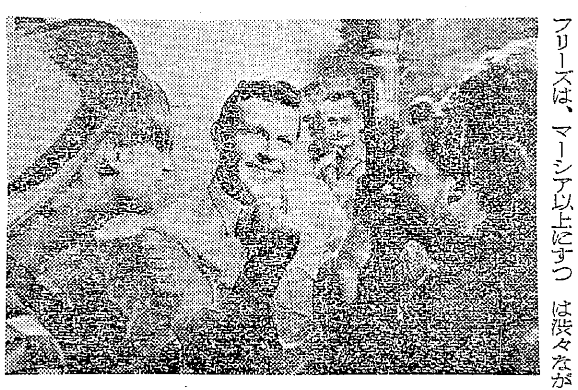
アメリカ現代文化の断面をえぐる

群集の中の一つの顔

【かいせつ】「エデンの東」「ベビイドール」などの名作を生んだ鬼才エリア・カザン監督が「波止場」の原作者バッド・シュールバーグの傑作と取組んだ野心作。

【すとーりー】KGRK放送局のアナウンサー、マーシア・ジエフリーズが、構慢なローンサム・ローズに出逢つたのは、アーカンサンス州ビゲツトにある拘置場の中だつた。彼女は自分の担当している番組「群集の中の一つの顔」のためにここに収容されている酔つ払いや浮浪者、乞食など雑多な連中の声をマイクにのせてみたいと思つたからである。保安官クライド・ホスマーの案内で最初にビーニイという老人、次いでルレウリンという男にあつたが断られ、彼女が三人目に眼をつけたのは、部屋の片隅に寝ころがつた、体の大きい若者ローンサム・ローズだつた。始めは眠つているところを起されたため、彼は剣突を食わせていたが、美貌のマーシアを見た途端に、態度が豹変した。

ローンサムは愛用の安ギターを弾いて民謡をマーシアに聞かせ、彼の素朴な味のある唄を聞いたマーシアは、そのローンサムの声を録音した。



この録音テープを聴いた彼女の叔父で放送局の経営者J・B・ジエフリーズは、マーシア以上にすつかりローンサムにほれこみ、彼を契約させるといいだした。美人のマーシアに口説かれてローンサムは渋々ながらもこれを承諾した。

ラジオの電波にのつたローンサムのヴオリユームのある声と、魅力あるギターの音は、たちまち市井に大旋風をまき起した。彼の口説上手な庶民性は、何よりも家庭の主婦連に愛されたし、田園情緒豊かな曲は田舎の青少年には、ぴつたりだつたのである。

ローンサムは今更のように、聴取者を惹きつけて、これを支配できる人間の力が、如何に絶大なものであるかを悟つた。と同時に彼は何時の間にか大衆が自分に付帯するものであるかを気づき始めたのである。【二十二日より大牟田名画座】

＝今週の映画＝

☆銀星（23－2）カビリアの夜、恋愛時代

☆大牟田名画座（22－31）群衆の中の一つの顔、虎の行動、ジラード事件〃弾拾い〃

☆太陽館（22－28）女であることと見合結婚

☆大天地（22－28）娘三羽烏、心と肉体の旅路

☆セントラル（22－28）二人の可愛い逃亡者、わが恋は終りなり